

最優秀賞

はるなつ

鹿児島県 鹿児島市立川上小学校四年 満吉 結菜

「うるさいな。私のコップはもういっぱいなの。それなのに、お母さんが最後の一てきを入れるんだよ。」

私は、どうしようもなく手足をバタバタさせてあげられた。母は、びっくりしたような、あきれたような顔をしていたが、

「そう、お母さんが、最後の一てきを入れたのね。結菜も大変ね。」

と言って部屋から出ていった。

母の言うことも分かる。勉強も明日のじゅんびも部屋のかたづけも、そして、朝起きることも、当たり前前のことを言っている。でも、イライラしてるときに注意されると、おもしろくない。

私には、心のコップがある。いやなことがあった時の気持ちをに入れる悲しいコップ。

四年生になって、私の心のそのコップは、いつも

あふれそうになっている。仲の良かった友達とクラスがはなれ会えなくなったことや、勉強に時間がかかったり習い事もむずかしくなったりしたこと。兄とのけんかもふえた。両親にもよくしかられる。思い通りにいかないことが多すぎる。毎日つまらない。どうしてこんなにおもしろくないのかな。

でもよく考えると、いやなことが一つもない日なんてあるはずがない。気が合う人もいれば合わない人もいる。好きな活動もあればきらいな活動もある。私は、「いやだな」と思うことばかりをみていたことに気が付いた。いやなことばかりに目を向けていると、うれしいことや楽しいことも、いつの間にか形を変えて心の悲しいコップに入っていくのだ。

私は、もう一つの心のコップを作ることにした。それは、うれしい気持ちが入るコップ。うれしいコップに入るとは、何かと考えてみた。ううん。あ

まりない。たん生日やクリスマスならあるけど、一年に一回だけだ。

ある日、母が、

「ウクライナの子どもたちは、今ごろどうしてるんだろうね。かわいそうだね。」

と言った。テレビでは、泣いているウクライナの子どものすがたがうつっていた。私は、はっとした。うれしいことは、特別なことだけではなく、「ふだんの何気ない生活の中にあるんだ」ということに気が付いた。母の作ったコーンスープが飲めること。

好きなアイスを食べられたこと。勉強ができること。自分のベットでゆっくりねむれること。兄と登校できること。両親が私を「かわいい」と言ってくれること。私が生まれて生きていくということ…。私のうれしいコップがあふれてきた。

私の心には、二つのコップがある。悲しいコップとうれしいコップ。二つのコップがバランスをとっている。私の今日という一日を表している。私は、もう、悲しいことだけにふり回されない。うれしいことも悲しいことも、毎日身近にあることに気が付いたから。

